

Black-faced Spoonbill

Japan Black-faced Spoonbill Network

アジアをつなぐ
クロツラヘラサギ
저어새
黒面琵鷺
Black-faced Spoonbill





▲ 生まれてまもない雛(ヒナ) 中国・遼寧省、形人塔



目:ペリカン目 科:トキ科
 属:ヘラサギ属
 種:クロツラヘラサギ

Platalea minor

絶滅危惧1B類〈環境省〉
 体長/約74~82cm
 体重/約1,460g~2,050g
 嘴の長さ/約17~21cm
 翼開長/約135~142cm
 脚の長さ/約22.5cm

クロツラヘラサギ <Platalea minor>

クロツラヘラサギはトキの仲間

クロツラヘラサギは「サギ(鷺)」という名前がついているのでサギの仲間だと間違われやすいのですが、ペリカン目のトキ科に属する水鳥で、トキと同じ仲間です。しゃもじのような嘴(くちばし)が特徴で、へら(籠)の形に似ていることから日本ではヘラサギ、欧米ではSpoonbill(スプーン)のようなくちばしと呼ばれています。

クロツラヘラサギとヘラサギ

ヘラサギの仲間は世界中に6種類いて、日本ではクロツラヘラサギとヘラサギの2種が渡来します。クロツラヘラサギとヘラサギはとてもよく似ていますが、大きさや目の周りの形や色、嘴の色などが少し異なります。



クロツラヘラサギ
 Black-faced Spoonbill

目の周りが黒いから、黒(クロ)い面(ツラ)、くちばしが籠(ヘラ)のようだから、クロツラヘラサギと名付けられました。
 〈全長約73.5cm〉

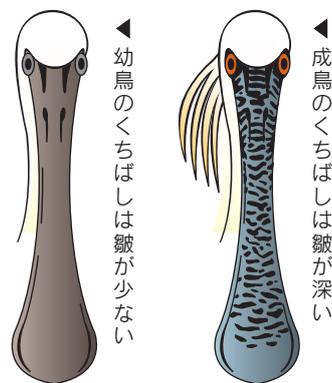


ヘラサギ
 White Spoonbill,
 Eurasian Spoonbill.

目の周りが白く、身体はクロツラヘラサギより少し大きいです。世界的に生息数は多いのですが、日本への飛来は少ないです。
 〈全長約86cm〉

〈成鳥〉〈亜成鳥〉〈幼鳥〉

クロツラヘラサギの生まれたばかりの雛(ヒナ)の嘴はオレンジ色で、だんだん黒くなります。40日くらいで身体も大人くらいになって、飛び練習も始めます。生まれた年の秋には海を越えて越冬地へ渡って行きます。だから越冬地で身体の大きさと子どもを見分けることはなかなか難しいようです。クロツラヘラサギの場合は、嘴の細かい皺(しわ)状の模様の深さや、嘴の色、風切羽の先の黒色の状態などで、年齢を見分ける参考にしています。



【幼鳥:juvenile】

おおまかに生まれて1年目くらい。嘴の色が暗い赤紫で、皺がほとんどありません。初列風切羽に黒色(下図参照)がはっきり見えます。

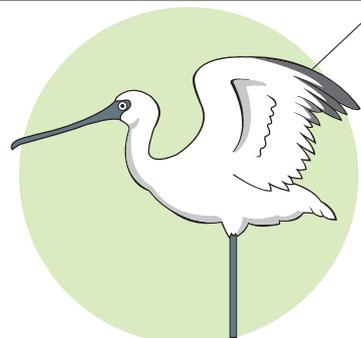
【亜成鳥:immature】

おおまかに第1回換羽から成鳥になるまでの期間で「若鳥」ともいいます。嘴の皺がだんだん深くなり、色も濃く変化していきます。風切羽の黒色が小さくなります。

【成鳥:adult】

おおまかに生まれてから3年~4年以上の成鳥は、嘴の色が黒く、皺も深くなります。風切羽も完全に白くなります。他に、眼が赤くなったり、眼の下の黄色い模様も目立って来ます。

▼ 若い鳥は風切羽の先に黒い色が残ります



クロツラヘラサギの「夏羽」

クロツラヘラサギは、春になって繁殖の季節が近づくと次第に頭のうしろの冠羽(かんう)が長く伸び、冠羽と胸がオレンジ色に染まります。夏羽(繁殖羽)になった姿はライオンのたてがみのようでとても美しいのですが、残念ながら完全な夏羽は日本ではあまり見る事ができません。それでも4月～5月頃になるとになると、うすい黄色に色づいたの冠羽を振りながら餌を追いかける姿を見ることがあります。



▲【夏羽/繁殖羽】春になると冠羽が長く伸びて、冠羽と胸がオレンジ色になります(写真は台南)。

くびを伸ばして飛びます

クロツラヘラサギは白サギ類とよく似てますが、飛んでいる姿を見比べると、違いがよくわかります。



▲首を延ばして飛ぶ姿

首を左右に振って餌とり

クロツラヘラサギは主に干潟や河口で生活しているため、行動は潮の干満に左右されます。しゃもじのような嘴は魚を捕まえるために進化したもので、嘴を水中で左右に振りながら歩き、触れた魚やエビ、カニ、カエルなどを捕まえて食べます。とてもユニークで可愛い餌採り方法です。特に群れて走りながら魚を追い込んで捕える様子は壮観です。



▲カワウと一緒に群れて魚を追い込んでいる様子。上流に向かって2度～3度繰り返します。(福岡市・今津干潟)



▲いそがしく首を振りながら餌を探します。



▲餌を捕まえると首を持ち上げてのみ込みます。

クロツラヘラサギのスキンシップ



エサ獲りが一段落した後や、水浴びをしている時になどに2羽のクロツラヘラサギがお互いに首のまわりなどを羽づくろいをしあう姿がよく見られます。とてもほほえましいシーンで、隣り合ったもの同士で行っているようです。

クロツラヘラサギはよく寝ています

クロツラヘラサギは昼夜とも活動しますが、どちらかというと夜行性(薄明・薄暮性)で、昼間はくちばしを羽根に入れ、1本脚で寝ている姿がよく見られます。



▲何時間も寝たままで動かないことがあります。

世界のクロツラヘラサギ <東アジアの越冬地>



▲台湾・台南七股クロツラヘラサギ保護区



▲台南七股にあるアジア各国の生息地への道標

生息地は東アジア

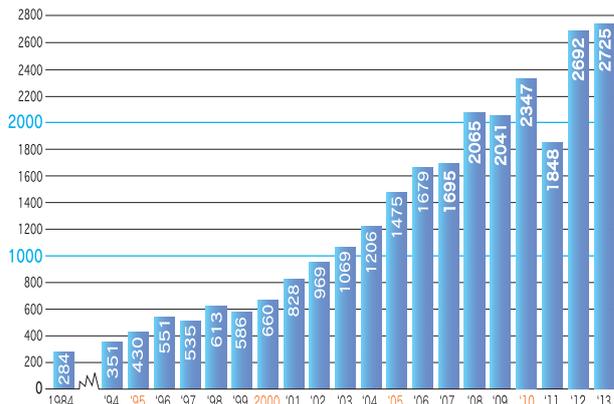
クロツラヘラサギは東アジアに生息する絶滅が心配されている鳥です。

確認されている繁殖地(卵を産んで育てる場所)は、朝鮮半島の西側の黄海上や、中国の遼寧省、ロシアのピョートル大帝湾周辺の地域などです。特に韓国と北朝鮮の国境付近に点在する島で多く繁殖します。繁殖時期は3月頃から6月頃です。

寒い冬を避けて南へ移動する越冬地は、台湾、香港、マカオ、ベトナム、日本などです。近年はタイやカンボジアでも移動が確認されています。

20年ほど前から東アジアで保全への関心が高まっており、国際的な調査・研究の協力や啓発活動などが活発に行われています。

▼世界の総羽数の変化(データ:香港バードウォッチングソサエティ)



【世界一斉調査】
1996年から主な生息地でクロツラヘラサギの移動が安定する1月の3日間を調査日に決めて、一斉に各生息地で羽数をカウントしています。この調査によって精度の高い世界の羽数が分かるようになりました。新たな生息地も確認されています。
主催/香港バードウォッチングソサエティ (HBWS)

韓国 <South Korea>

韓国では、繁殖期に江華島(Ganghwa-do)周辺(漢江河口付近から黄海北沿岸部)や、仁川広域市(Inchon)の沿岸部などの岩場の無人島で繁殖します。

越冬期はクロツラヘラサギが南へ移動するため最南端の済州島(Jeju-do)で20羽前後が残る程度になります。



▲済州島

中国 <China mainland>

中国東南部の海沿いの干潟や湿地には、たくさん渡りの中継地や越冬地があって300羽前後が越冬します。特に福建省(Fujian)の沿岸部や海南島(Hainan)が大きな生息地になっています。衛星追跡などのデータや観察情報によるとクロツラヘラサギは中国の内陸部にも移動しているようです。

また、黄海北西部の遼寧省の石城島のそばの2つの無人島で少数の繁殖が確認されています。

一時は中国沿岸部の埋立てや開発でクロツラヘラサギの生息地の消失が心配されましたが、近年、中国では湿地環境の保全に取り組む動きが活発化しつつあります。



▲福建省



▲遼寧省



- 主な繁殖地
- 主な越冬地
- 主な渡りルート

台湾〈Taiwan〉

世界最大の越冬地は、台南市の曾文溪河口の北に広がる養魚場周辺で1,000羽前後が越冬します。クロツラヘラサギは養魚場の魚を目当てに集まりますが、越冬シーズンは養魚場の閑散期にあたるので、養魚業者とのトラブルはないようです。2002年12月に養魚場周辺でボツリヌス菌による大量死事故がありました。これを大きな教訓として環境監視や啓発の努力をかさねています。



【台南・七股で大量死】
2002年12月にボツリヌス菌に汚染された養魚場の魚を食べた73羽が死にました。

七股地域にはクロツラヘラサギの保護区が設定され、研究センター、生態展示館などがあって、クロツラヘラサギを中心にカキ養殖や美しいマングローブ林などを楽しむ多くのエコツアー観光客で賑わっています。2010年にはクロツラヘラサギの保護区を含めて「台江国家公園(Taijiang National Park)」になって国の管理で保全がすすめられています。クロツラヘラサギの生息エリアも嘉義県(Chiayi)や、高雄市(Kaohsiung)の他、台湾全土に広がっています。



▲台南／七股



▲台南／四草

澳門〈Macao〉

マカオでは1990年頃からクロツラヘラサギの飛来が増え始め、現在はタイバ島の保護区などで約50羽が越冬しています。都市部の開発で干潟やマングローブ林が失われてきましたが、政府はクロツラヘラサギの保護のために2001年に2カ所(Lotus Flower Bridge Wetland, Taipa-Coloane Wetland)の湿地保護区を整備しました。



▲タイバの保護区

越南〈Vietnam〉

ベトナムではレッドリバー(Red River)の河口デルタにあるXuan Thuy National Parkで50羽前後の確認がありますが、その他の地域での確認は少ないようです。湿地開発の影響などが心配されています。



▲レッドリバーデルタ

香港〈Hong Kong〉

香港は深圳湾(Inner Deep Bay)に面して、エビなどの養殖場を含むマイポ自然保護区(Mai Po)があるので、クロツラヘラサギが300羽以上越冬する大きな生息地になっています。WWF香港が管理するマイポ自然保護区では早くからクロツラヘラサギを取り上げ、教育プログラムを作ったり、啓発活動に取り組んできました。



▲マイポ自然保護区

クロツラヘラサギの繁殖地 <韓国:江華島・仁川周辺>



▲ 韓国・江華島 Gaksiam / 脚輪装着直後



▲ 韓国・仁川市 Namdong-ji

ふるさとは小さな無人島

クロツラヘラサギの繁殖地は、朝鮮半島の西北側の黄海上に集中しています。北朝鮮側にも独島などの繁殖島がありますが情報が多くありません。他には、さらに北の中国・遼寧省にある石城島のそばの「形人坨」、「元宝坨」の2つの無人島と、ロシアのピョートル大帝湾の「フルゲルム島」などが確認されている主な繁殖地です。

クロツラヘラサギが繁殖している場所のほとんどは草木の少ない岩がむき出しの小さな無人島です。

それぞれの島はいつも安定した繁殖数ではなく、年によって大きく変化し、繁殖しなくなった島や、新たに繁殖島が確認されることもあります。

黄海は干満差が約8mもあるので、繁殖島に船で近づくことも容易ではなく、限られた時間での調査はとても大変です。



▲ Gaksiamの調査に向かう韓国チームのスタッフ。

韓国で繁殖地調査

韓国内で2003年から2011年までに16カ所の繁殖地が確認されています。

韓国と北朝鮮との国境そばにある<Yodo>では、2009年に150~200個の巣が確認されました。島は300m×100mくらいで、岩で出来ていて草が少し生えてるだけです。多くのセグロカモメやカワウなどと一緒に繁殖をしています。

<Bido>では2008年に130巣が確認されていて、カワウ、ウミネコ、セグロカモメ、ミヤコドリ、アオサギ等も繁殖しています。

<Yudo>では2006年に104巣が確認され、枯れた木の上などでも営巣が確認されています。ここは韓国側から島の東側半分しか観察することが出来ません。

このような場所の調査には、韓国軍の許可が必要になる場合があります。

江華島の南沿岸にある<Gaksiam>では2006年から繁殖を確認しています。

餌採りは周辺の干潟や水田に行きますが、Yudoの調査では最大約20km離れた場所まで行った個体も確認されました。



▲ 岩ばかりの無人島 Sokdo

巣は約42cmくらい

巣は円形で平均42.5cm。主な素材は枯れ木と植物などです。

産卵数は3個が多くて4個の場合もあるようです。卵は4月~5月にかけて生み、孵化するのは5月が一番多く、遅い個体は6月末頃まで孵化があります。島には枯れ木などの巣の材料が少ないため、NGOが巣材を運んで繁殖のサポートをしています。



▲ クロツラヘラサギの巣と卵。





啓発活動を行いました。
クロツラヘラサギが水田に入ると、農業者はクロツラヘラサギを驚かさないようにそっと場所を移動して別の作業をする姿が見られました。



▲ Yudoの鉄条網の国境線を越えて、江華島の水田で餌を採るクロツラヘラサギ。

都市の中に繁殖島

仁川広域市(Incheon) Songdoの遊水池の人工島(約35m×25m)では、2009年に繁殖が確認され増え続けています。ここでは市民が100日間連続調査をしたり、24時間調査や観察会・イベントなどが行われ、市民・子どもたちに親しまれています。人々はこの人工的な繁殖島を「クロツラヘラサギ島」と呼んでいます。しかし遊水池の水質は悪く、クロツラヘラサギは遊水池では餌を採らずに、道路を越えたソンド干潟で餌を採ります。ところがソンド干潟は巨大な都市開発による埋立てで次々に埋め立てられています。今後、主要な餌場が失われてしまった時の影響が大変心配されています。



▲ 巨大都市の中の小さな繁殖島(Namdong-ji)。

ヒナにカラーリング

クロツラヘラサギの繁殖地では、移動ルートを知るために、ヒナにカラーリング(脚輪)を着けたり、発信器を着けることがあります。慣れたスタッフが漁船やゴムボートなどで繁殖島に上陸し、生後3週間程度の元気なヒナを網で捕獲し、船上、もしくは陸上へ運んで、体重や嘴、脚、羽の長さなどを記録して脚輪を着けます。羽根を抜いて遺伝子データを採ることもあります。その後、慎重にもとの巣へ戻します。ヒナの捕獲の際、親鳥や飛べる若い個体は近くの干潟などに逃げますが、スタッフが去ってしばらくすると戻って来ます。これらの作業は、親鳥や他のヒナを驚かせたり大きなストレスを与えるので、細心の注意を払って短時間でを行います。



▲ 2011年6月:E69の脚環装着。

水田で餌採り

韓国の江華島(Ganghwa-do)では、クロツラヘラサギの成長期にしばしば水田で餌を採ることが確認されています。5月～6月の子育て時期には干潟よりも水田を利用する方が多いようです。ドジョウやカエル、小魚などを捕獲しています。保護団体などでは、周辺農家とのトラブルや農業被害が起きないように、農業者への



▲ 2010年6月:バンティングの後の記録撮影。K92～K98が装着されました。



▲ クロツラヘラサギ島を観察する子どもたち。

日本のクロツラヘラサギ <九州・沖縄の越冬地>



▲佐賀市・大授揚
クロツラヘラサギとハマシギの群れ



▲商業施設や住宅地がある国道沿いの小さな川で
餌を採るクロツラヘラサギ
(福岡市西区・えのくち川)

日本では新しい“種”

クロツラヘラサギの日本の主な越冬地は、朝鮮半島に近い九州や沖縄周辺の河口や干潟です。過去に有明海の干潟や諫早干拓、出水干拓などで少数の観察記録はありましたが、1985年頃から博多湾の今津干潟で定期的に3～5羽の飛来が確認されるようになりました。その後1995年頃から、博多湾の埋立て地や、熊本県の氷川河口、鹿児島県の万之瀬川河口など、九州各地でも飛来数が急激に増えていきました。

現在、九州・沖縄エリアで約40カ所の生息地が確認され、300羽前後の越冬情報が寄せられています。

クロツラヘラサギは日本ではまだ新しい種ですが、アジアの干潟や河口を代表する絶滅が心配されている渡り鳥です。

生息地の環境を保全する上で最も重要な指標種として注目されています。

山口湾 (山口県 山口市)

クロツラヘラサギの飛来は2009年頃から急激に増え、山口市のきらら浜自然観察園や、隣接する土路石川河口や榎野川河口に10羽以上が飛来します。

また、山陽小野田市の厚狭川河口や下関市木屋川の干潟でも飛来が確認されています。



▲きらら浜自然観察園から山口湾を望む

周防灘 (福岡県 北九州市・行橋市)

北九州市の曾根干潟や空港埋立て地で少数の飛来は確認されていましたが、2009年頃から少し南の行橋市の苅田周辺で20～30羽の飛来が見られるようになりました。干潮時に今川河口や白石海岸の干潟に現れる細い水路を餌場として利用し、満潮時にはフェンスに囲まれた浅い調整池などを休息場として利用しているようです。

ここには多くの工場があり、人の暮らしにとっても近い場所なので確実な環境保全が望まれます。



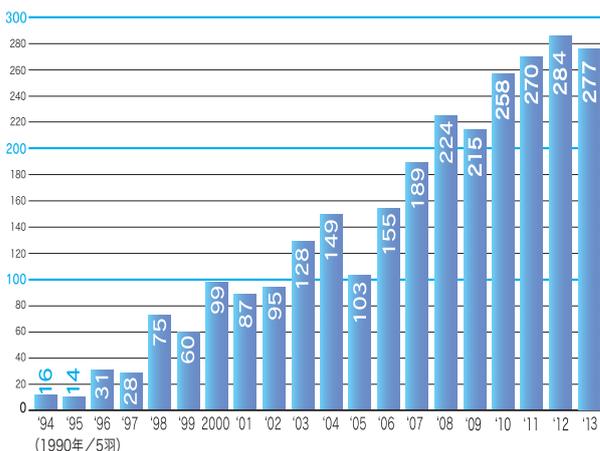
▲今川河口の中洲

津屋崎入り江 (福岡県 福津市)

クロツラヘラサギは2000年頃から観察されるようになりました。漁港から奥まった入り江にアシ原があり、その周辺で採餌したり休んだりします。廻りには田畑が広がり、農業用水路やため池などでも観察できます。ここでは休息場として田畑を利用する姿もよく見られます。

このエリアは他の野鳥も多く、2006年に福岡県の鳥獣保護区域に指定されました。

▼日本の総羽数の変化 (データ: 香港バードウォッチングソサエティ)



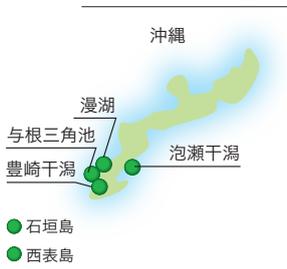
【世界一斉調査への協力】

日本クロツラヘラサギネットワークでは2003年から、香港バードウォッチングソサエティが主催する世界一斉センサス調査に、(公財)日本野鳥の会と協力して日本の調査データの提供を行っています。



▲ 津屋崎入り江から2kmくらい離れた畑地

● 国内の 主な生息地



博多湾周辺 (福岡県 福岡市)

【今津干潟／瑞梅寺川河口】

主に瑞梅寺河口の小さな中洲を休息場所を塘(ねぐら)として利用し、川で餌を採ることが多いのですが、夜の満潮時に水位が上がりすぎた時は周辺の農業用ため池などへ移動しているようです。

朝鮮半島に一番近いため、移動期のはじめ(11月頃)には50羽前後が飛来します。ここでは、上げ潮時の川筋をカワウなどと一緒に集団で魚を追いかける、通称“追い込み漁”が見られることがあります。最近では、街中の交通量の多い国道の橋の直下で餌採りをしている姿も見られます。



▲ 今津干潟(瑞梅寺川河口)の中洲

【多々良川河口干潟】

2000年頃から定期的に飛来するようになり、毎年、安定的に15羽以上が越冬しています。主に小さな中洲を休息場、塘として利用していますが、近年、周辺のため池などへ移動範囲が広がっているようです。周辺は住宅地で両岸には遊歩道が整備されているため、散歩で訪れる人や周辺の住民にとっても親しまれています。



▲ 満潮時に杭の上で休むようす。

【和白山干潟】

博多湾の東奥部にある自然海岸が残る干潟で、クロツラヘラサギが休息や餌採りなどで時々飛来しています。移動の初期と後期の飛来が多く、越冬期の利用は少ないようです。住宅地の細い河川で餌を採る姿も見られます。

加布里湾周辺 (福岡県 糸島市)

加布里湾にそそぐ泉川河口周辺には、アシ原が美しい潮遊び(調整池)や農業用クリークがあり、加布里湾(船越湾)には石積みの消波護岸などがあって、クロツラヘラサギは潮汐や風向きによってこれらの環境を利用しています。時には畑地で休んでいる姿や、カキ小屋のすぐ横で、人の接近も気にしないで餌採りをしている姿を見かけます。また周辺の住宅地にある農業用のため池もよく利用します。10羽前後が越冬します。

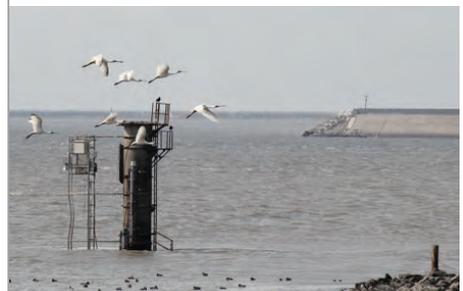


▲ 干潮の加布里湾

有明海北部 (福岡県 柳川市／佐賀県 佐賀市、鹿島市)

【大授掬(だいじゅがらみ)】

日本有数の広大な干潟はシギ・チドリ類やズグロカモメなどの国内最大の飛来地です。クロツラヘラサギの飛来も1900年代から増え、2000年代からは10羽～30羽ほどの飛来があります。周辺には、嘉瀬川河口、早津江川河口、筑後川河口、沖の端河口などの飛来地があり、潮の干満に合わせて移動したり、一体的に利用しているようです。



▲ 筑後川河口

【新籠(しんごもり)・浜川河口】

新籠では2000年頃から増えはじめ、主に餌場としています。浜川河口は2009年頃から見られはじめ、30羽を越えることもあります。浜川では漁港そばの波止や中洲で休んでいる姿が見られます。ここでも干満に合わせて周辺の河口や新籠の干潟などへ移動しています。



▲ 浜漁港の中洲

日本のクロツラヘラサギ <九州・沖縄の越冬地>



▲ 八代市・前川河口



▲ 埋立て中の熊本港

八代海周辺 (熊本県 宇城市、氷川町、八代市)

【氷川周辺】

八代海北奥部に大野川河口、砂川河口があり、広大な干潟を餌場として、河口から内陸部にかけて休息場として利用しています。農作業や工事、釣り人など人的圧力も大きいようです。

氷川は1995年頃から定期的な飛来が確認されています。ここでは新幹線の開通に伴う橋梁工事が実施され、クロツラヘラサギの生息地への影響が懸念されましたが、地元保護団体などと鉄道整備支援機構との調整により、デコイを利用した生息場所の移動や、工事期間の制限などが実施され、悪影響を回避することに成功しました。



▲ 氷川河口：新幹線の橋の工事のために、生息地を移動させるため設置されたデコイ(左上の3体)

【鏡川周辺】

野崎干拓地の畑地や、鏡川河口の船だまりで休息しています。特に船だまりに設置された鉄製の消波柵の上や、右岸堤防で休む姿がよく見られます。ほかの生物の侵入がないためとても安全な休息場になっていて、漁船の通行にも慣れているようです。人工的な環境ですが、50羽前後の飛来があり国内最大級の越冬場所になっています。



▲ 鏡川の消波柵

荒尾干潟・菊池川周辺 (熊本県 荒尾市、玉名市)

荒尾干潟は2012年にラムサール登録湿地に指定されました。クロツラヘラサギは干潟で採餌をし、旧競馬場内の水辺などで休息している姿が見られます。今後、競馬場跡地の利用のあり方が注目されます。菊池川河口や唐人川の河口は生物の豊富な広い干潟があり、10羽前後が飛来します。



▲ 旧競馬場西側の荒尾干潟

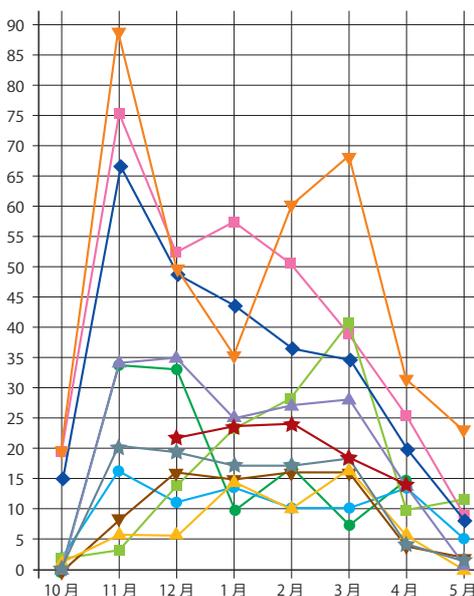
熊本港周辺 (熊本県)

熊本新港の西側の航路浚渫土砂の捨て場としてできた広大な池をクロツラヘラサギは主に休息場として利用しています。北に坪井川河口、白川河口があり、南に緑川の河口があって干潟が干出し、餌場として一体的に利用しています。近隣の沖新ハス田もまれに餌場として利用しています。国内最大級の生息地になっていますが、港の整備が進むため環境は不安定であり、将来の消滅が課題となっています。また、隣接海域では越冬期にカモ猟の発砲があったり、パラグライダー愛好家の生息地への侵入など、人によるストレスも大きいようです。

九州・沖縄エリアの各月のサイト別飛来数

2012年10月～2013年5月
集計/日本クロツラヘラサギネットワーク

- ▼ 八代海周辺 ▲ 錦江湾奥部周辺 ▲ 志布志湾周辺
- ★ 沖縄本島 ★ 万之瀬川周辺 ■ 有明海北部周辺
- ◆ 熊本港周辺 ▼ 一ツ瀬川河口 ● 山口湾周辺
- 博多湾周辺 ● 周防灘周辺



(2012年から越冬期の主要サイトの各月毎の飛来数を集計しています。南下期～越冬期～北上期の動きが判るようになりました。)

【前川河口、球磨川河口周辺】

前川河口は砂泥質の干潟が広がり、クロツラヘラサギの良好な餌場となっています。満潮時には中洲を休息場として利用しますが、漁船の出入りや、カモ猟、潮干狩りなど人的な影響が多い場所でもあります。球磨川河口も同様に、金剛島という岩礁の島を休息場として利用していますが、漁船の出入りが多い場所です。

万之瀬川河口周辺 (鹿児島県 南さつま市)

1997年頃から飛来が確認され、万之瀬川河口約1.5kmの範囲内で約20羽前後が安定的に越冬しています。

周辺の一部は吹上浜海浜公園内で、対岸は日本最大規模のハマボウ群落が川沿いに続いていてハクセンシオマネキなどのカニなども多く生息しています。干潮時には砂質の干潟が干出するので最適な餌場になっています。2007年2月6日万之瀬川河口域のハマボウ群落及び干潟生物群集が国の天然記念物に指定されました。

近年、少し南の大浦干拓周辺でもクロツラヘラサギの飛来が少数確認されるようになりました。



▲ 万之瀬川河口干潟

錦江湾奥部 (鹿児島県 始良市、霧島市)

1997年頃から別府川の中洲を採餌場所、加治木調整池を休息場として利用するようになりました。その後、錦江湾の東側沿岸へ生息域が広がり、霧島市の天降川周辺の隼人調整池や国分広瀬調整池でも観察されるようになり、30羽前後が飛来する重要な生息エリアになっています。

日本を代表する観光地“桜島”を背景に飛ぶ姿は、世界に誇れる景観です。

ここでは養殖場に隣接する水路や調整池など、餌が多い環境があるので飛来数が増えていると考えられます。人為的に水位が変動しますが、越冬期のクロツラヘラサギにとっては餌が採りやすいようです。一方、工場排水の水質の影響が懸念されます。



▲ 隼人調整池

志布志湾周辺 (鹿児島県 曾於郡、志布志市、宮崎県 串間市)

1990年代末頃、鹿児島県曾於郡大崎町の菱田川で一時観察されており、2000年代末頃から再び鹿児島県志布志市の安楽川、曾於郡大崎町の菱田川、田原川、及び宮崎県串間市の天神川などで定期的に3～8羽の飛来が見られています。



▲ 串間市・天神川

一ツ瀬川河口周辺 (宮崎県 宮崎市、新富町)

九州の東海岸の越冬地です。2000年頃から定期的な飛来があり、最近では飛来数が増えて15羽前後が観察されています。

中洲や入り江、調整池、漁港などがあり複雑な地形で、干満差も大きくないため、クロツラヘラサギは河口全体を餌場として利用し、少し上流の砂洲や左岸のアシ原や調整池などを休息場として利用しています。

釣り、パラグライダー、ボードセーリングの人などが生息場所に入る様子が常態化しており影響が懸念されています。



▲ 一ツ瀬川の中洲

沖縄本島 (沖縄県 那覇市、豊見城市、沖縄市、南城市)

【漫湖】

那覇市と豊見城市の市境にある泥干潟で、「ラムサール登録湿地」に指定されています。3～6羽前後が飛来し、与根三角池などに行き来しています。休息時はマングローブの樹幹で隠れるように休みます。



▲ 漫湖のマングローブ

【与根三角池、豊崎干潟】

与根三角池(遊水池)は那覇空港のすぐ南にあり、10～15羽前後が飛来します。

降水によって水位が変わり、ゴミなども増えている、農薬流入による魚を食べたクロツラヘラサギが保護されたこともあります。ここのクロツラヘラサギは人馴れしていて、採餌のときはそばに近寄ってきます。豊崎干潟はさらに南へ1kmほどの位置にあり、埋立てから残された干潟で、石積みをして満潮時の休息場が造成されています。

この2カ所は、沖縄地域では餌場、休息場として最もクロツラヘラサギの利用の多い重要な場所になっています。



▲ 与根三角池

【泡瀬干潟】

中城湾の北側に位置し、4～9羽前後が飛来します。渡来から1月頃まで、昼間は米軍の基地内で寝ていることが多く、1月以降は干潟や後背地の比屋根湿地で採餌する姿を観察する機会が増えます。沖合で埋め立て工事が進行中で今後の影響が心配されます。

【佐敷干潟】

中城湾の南側に位置する前浜干潟で、近年は毎年1～4羽のクロツラヘラサギが記録されるようになりました。干潟や周辺のマングローブの水路で採餌しています。





▲ 2011年5月／韓日クロツラヘラサギシンポジウムの日本チームの記念撮影(韓国・江華島)



▲ 毎年1月に実施される「世界一斉センサス」のレポート 主催: Hong Kong Bird Watching Society

クロツラヘラサギと国際協力

生息地の情報共有

クロツラヘラサギの保全のためには、クロツラヘラサギの生態を知ること、繁殖地を知ること、越冬地を知ることが重要です。

1990年代初めからクロツラヘラサギへの関心が強まり、日本、韓国、北朝鮮、台湾、中国、香港などで、研究者やNGO、市民など様々な組織がシンポジウムやイベントを開催してきました。国際シンポジウムも多く開催されました。これらのシンポジウムにより、多くの情報や知識を共有することが出来ました。

日本は越冬地で、繁殖地の様子を知ることが出来ませんが、国際シンポジウムなどでその生態や環境を学ぶことができれば、越冬地の保全や啓発にとっても役立ちます。

1993年から世界一斉センサスが実施され、Hong Kong Bird Watching Societyの主催によって続けられています。1984年に世界で284羽しか確認されていなかったクロツラヘラサギが、2013年には2,725羽まで増えたのは、繁殖の成功や生息地の広がりが大きな要因だと思われませんが、アジアの多くの人々の関心の高まりと、熱心な調査と集計の国際協力が大きな力を発揮したことは間違いありません。

ひとつの国だけで渡り鳥を守ることはできません。すべての繁殖地とすべての越冬地・中継地の協力が必要です。



▲ 2011年4月／国際クロツラヘラサギシンポジウム関係者記念撮影(台南・七股／黒面琵鷺生態展示館)



▲ シンポジウムでは台南市長を囲んで、台湾、香港、韓国、ベトナム、マカオ、日本の参加者がクロツラヘラサギ保全の協力を固い握手で約束しました。

国際協力で調査

クロツラヘラサギの「渡り」のルートを知るために、捕獲した個体の脚にカラーリングを装着しています。

繁殖地では、生まれて3週間くらいで、体重が約1,400~1,500gの元気なヒナを捕獲して、片方の脚にナンバーを記したリングを着け、もう片方に2色~3色の異なる色のリングを着けます。両方の脚に着けるのは、クロツラヘラサギは休む時に片方の脚だけで立っている場合が多いので、どちらかの脚を見れば色か番号で識別できるようにするためです。このカラーバンドの装着記録は各国で共有され、確認された地域からの情報も集約されて移動の経路などが分かるようになっています。

多くの国で脚環が着けられています。

〈韓国〉KX1~KX9、K31~K00、EX1、

E01~E99、S01~S52

〈香港〉A01~A39

〈台湾〉TX1~TX6、T01~T56

〈ロシア〉R01~R09、RU01~RU19、UB

〈日本〉J01~J17

※20013年12月現在



▲ Gaksiam調査: 韓国、台湾、日本の共同チーム

さらに細かく渡りルートや、中継地を知るために、衛星送信機を使って調べています。背中に小さな送信機を着けて追跡調査をしています。この調査によって、長距離の渡りや時間経過、また生息地での細かな移動も分かるようになりました。

2011年には、カンボジアへの移動も衛星追跡で初めて確認されました。



▲ 衛星追跡の発信器をつける様子。飛行の抵抗にならないように慎重に装着します。



生息地の環境保全と人の暮らし

生息環境の保全

アジアの湿地のシンボルバードであるクロツラヘラサギの保全努力は、同じ環境で暮らすサギ類、シギ・チドリ類やカモ類などの鳥類にとどまらず、餌生物も含めた周囲の動植物の生息地を保全するという努力につながります。傘下(周辺)の多くの種の環境も守られるという意味で、クロツラヘラサギはアンブレラ種と呼ばれることもあります。クロツラヘラサギの生息環境は、繁殖地は小さな無人島なので、人の生活と関連した直接的、人為的な改変は少ないようです。しかし、中継地や越冬地は、養魚場や河口、干潟などの湿地環境です。水域が残る埋立て地もよく利用しています。特に九州、沖縄の越冬地の場合は人の生活空間と重なる場所が多く、養魚場や農地、調整池、住宅地など環境に対して人為的な改変が日常的に行われています。クロツラヘラサギが地域に飛来していること知ることが、それぞれの生息地における“人の暮らしと環境との共生や調和”を考えをきっかけにしてほしいと願っています。

クロツラヘラサギは潮の干満に合わせて、餌を採ったり休む場所を選びます。

クロツラヘラサギが好きな、河口や干潟にはシギ・チドリやカモなど、多くの渡り鳥と一緒に暮らしています。

河口や干潟には魚やカニ、エビなどの生きものがたくさんいます。

クロツラヘラサギが寒い時期を過ごす越冬地では、主に河口や干潟で暮らしています。潮が満ちた時に海の底になったり、潮が引いた時に陸地になったりする河口や干潟には、環境に適応した、ゴカイやカニや小魚など、鳥の餌になる生物がたくさんいるので、クロツラヘラサギの他にもカモ類やシギ・チドリ類などの渡り鳥がたくさんやってきます。渡り鳥たちはたくさんの国で餌を採ったり休憩して長い距離を移動します。河口や干潟は渡り鳥の“ガソリンスタンド”のような役目をしています。だからどこかの国で環境が壊されれば「渡り」を続けることができません。残念ながらこのような環境は世界中で失われています。だから渡り鳥たちも減っています。世界中で河口や干潟の豊かな環境をいっしょに守らなければなりません。



▲ 干潟や河口には多くの渡り鳥がやって来ます。

ケガや事故死が相次いでいます

九州・沖縄の生息地には人の暮らしの影響が大きい場所が多くあります。最も多い事故は河川に捨てられた釣針や釣り糸によるものです。釣針がクロツラヘラサギの口に刺さったり糸が絡まると、嘴を振って外そうとするので、ますます糸が強くと絡まって嘴が開かなくなり、餌を採れなくなって衰弱死するケースです。釣り糸が羽に絡まったら飛べなくなります。他に、餌を採るときにいそがしく歩きながら嘴を振って探すので、川の中の大きなゴミ(自転車、タイヤ、ブロックなど)にぶつかって嘴が折れたり、脚が折れたりすることもあるようです。

怪我をした個体は人が近づくと逃げるので、弱るのを待って捕獲する機会が多いのですが、すでに衰弱していて、治療をしても手遅れになる機会が多いのです。地域、行政などの協力も得ながら、ゴミを河川に捨てない啓発や清掃作業、傷病個体の救出、治療の体制を整えることなどが望まれます。



▲ 釣り糸が絡まって嘴が開かなくなると餌を採ることができなくなります。

CEPA/啓発

クロツラヘラサギの保全のためには生息地がある自治体や、公民館、自治会、小・中学校などへの啓発活動が重要です。農業者や漁業者の方々への働きかけが必要な場合もあります。観察会やイベント開催、ポスターやパンフレットの配布などをつうじて皆さんに親しまれながら保全につながっていくことが望まれます。



▲ 絵を描いてポスターづくりをする子どもたち。



▲ 子どもたちの可愛い作品

クロツラヘラサギと友達になろう



▲桜島の噴煙を背景に飛ぶクロツラヘラサギ。
(鹿児島県始良市)

クロツラヘラサギ Q&A



なぜ、北と南で暮らすのですか？

クロツラヘラサギの繁殖地(卵を産んで育てる場所)は朝鮮半島の西北沿岸の地域などで、寒くなると川が凍ったり、魚が川の底の方でじっとしていることが多いので、餌が獲れなくなります。だから餌が獲れる南の地域(越冬地)へ移動します。そして次の年、温かい春になると、子どもを産むために北の繁殖地へ帰ります。



▲繁殖地と越冬地の環境保全が大切です。

クロツラヘラサギの雄と雌

雄(オス)と雌(メス)の違いは雄の方が嘴が少し長いのですが、外見ではほとんど区別できません。

【雄】約180~210mm

【雌】約170~190mm

どんな場所が好きですか？

【エサが豊富な河口や干潟がある場所】

クロツラヘラサギは泳ぐのが苦手で、脚が届かない(19cm~20cm以上)、深い水域は苦手です。だから潮が引いて浅くなった干潟や河口にやってきます。

【人や他の動物に襲われる危険がない場所】

広くて安全で見晴らしも良くて、ゆっくり休める場所です。満潮の時や、風が強い時にはアシ原などで休みますが、必ず風下は見晴らしが利いて、危険が迫ればすぐに飛び立てる場所です。繁殖地の岩だらけの無人島も少し窮屈な場所もありますが、大型のほ乳類や人間に襲われる危険はないようです。



▲クロツラヘラサギがいる環境を見つめ直そう。

好きな餌(エサ)は何ですか？

15cmくらいの魚類が一番好きです。魚の種類は地域によっていろいろです。他にもエビやカニ、貝類や水性昆虫なども食べます。渡りの時期や越冬期によって違いはありますが、1日に平均230gくらいの餌を採るとい報告もあります。



▲大きな魚やカニなども捕まえて食べます。

どんな声で鳴きますか？

豚?の声に似ていて、低い声で「グウ～」と小さく鳴きます。



子どもは何日くらいで飛べるようになりますか？

生まれてから45日くらいで飛べるようになります。無人島の高い場所で、海からの風を受けて飛ぶ練習をします。

5月～6月に生まれて、10月には遠い国へ渡っていきます。



▲ 不安げに初めて飛ぶ練習です。(中国・遼寧省)

なぜ、1本足で休むのですか？

多くの水鳥が一本足で休みます。寒くて体温が下がってエネルギーが消費されることを嫌います。だからなるべく寒さを防ぐために嘴や脚など露出している部分が風にあたらないようにする工夫です。

片足づつ腹であたためて時々入れかえています。同じように嘴も羽根の中に入れて寒さから守っています。



▲ 嘴と脚を羽根で暖かくして休んでいます。

何年くらい生きるのですか？

研究が充分ではないのははっきりわかりません。人工飼育記録で20年以上生きた記録はありますが、自然界の厳しい条件を考えると15年くらいではないかと思われれます。今後、脚輪の着いた個体などで明らかになることが期待されます。



▲ クロツラヘラサギが住みやすい環境を守りたい。

クロツラヘラサギに会いに行こう！

クロツラヘラサギは、コサギよりも少し大きくて嘴の形や餌を採るしぐさが特長的なので、初めての方でも見つけやすい鳥です。



- 遠くにいるときが多いので双眼鏡や望遠鏡があるとより楽しめます。
- バードウォッチングのときは近づきすぎたり、大きな声を出したりして鳥たちを驚かさないように気をつけましょう。
- 干潟では小さな生き物や貴重な植物などにも注意して観察してください。
- 市民参加のバードウォッチングも各地で開催されていますので、日時、場所を確認して参加することをおすすめします。
- 干潟や河口で望遠鏡(プロミナ)や双眼鏡で野鳥を観察している人がいたら、気軽に声をかけて教えてもらおうといいでしょう。



▲ クロツラヘラサギを探してみましょう。

クロツラヘラサギの情報提供のお願い

皆様の周辺でクロツラヘラサギを観察した情報があれば、ぜひお知らせください。また、調査スタッフも募集しています。初心者の方でも大丈夫です。楽しく観察をしながら一緒にクロツラヘラサギを守りましょう。問い合わせ・ご連絡は、事務局：松本まで



▲ クロツラヘラサギを見つけたらお知らせください。

日本クロツラヘラサギネットワーク

日本クロツラヘラサギネットワークは、2002年6月23日に結成され、(公財)日本野鳥の会、(公財)WWF.ジャパンなどの協力を得ながら活動を続けています。九州、沖縄を中心に国内のクロツラヘラサギの飛来数、生息状況を調査、認識することによって、クロツラヘラサギの保護と、湿地、干潟などの環境保全に資すること。またアジア各国の生息地との交流、情報交換を通じて、国際的なクロツラヘラサギ保全に貢献できることを目的としています。

《これまでの主な活動内容》

- ・ 2002年～2013年まで、各年毎のクロツラヘラサギの飛来状況の現地調査を行い記録を整理し報告書を作成。及び報告会を開催。
- ・ 2002年～2013年：香港バードウォッチングソサエティが主催する世界一斉調査に参加。(公財)日本野鳥の会と協力してデータの提供を行っている。
- ・ 2004年～2006年：韓国KFEM主催、クロツラヘラサギ国際シンポジウムに参加。日本の状況、課題を発表。
- ・ 2011年4月：台湾政府・台南市主催の国際クロツラヘラサギシンポジウムに招聘され、日本の状況、課題を報告。
- ・ 2011年5月：韓国・江華郡主催の国際クロツラヘラサギシンポジウムに招聘され日本の状況、課題を報告。
- ・ 2003年度：(公財)日本野鳥の会の委託事業として、「河川における鳥類の生息環境保全に向けた基礎調査・クロツラヘラサギの生息状況把握、および保全への提案」の報告書作成
- ・ 2008年度：(公財)WWF.japanの委託事業として、「日本におけるクロツラヘラサギの主な渡来地の生息環境調査」の報告書作成
- ・ 2011年1月：繁殖地がある韓国のこどもたちと越冬地がある熊本県八代市鏡西部小学校の子供たちとのクロツラヘラサギ交流を実施。
- ・ ラムサール条約のクライテリアの参考資料として、当会のデータを環境省に提供。



代表：高野 茂樹

事務局：松本 悟

〒815-0033 福岡市南区大橋1-4-20-601号

TEL 092-408-5214/080-5251-8677

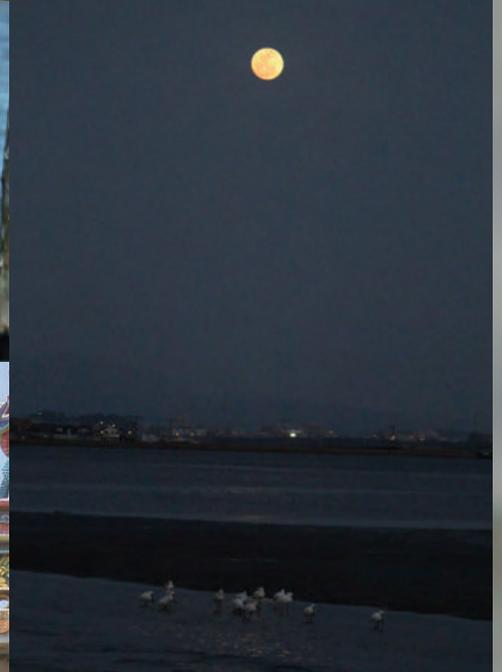
e-mail cocontei-matsu@nifty.com

アジアをつなぐ クロツラヘラサギ

2014 International Black-faced Spoonbill
Symposium in Yatsushiro



Japan
Black-faced Spoonbill
Network



この冊子の制作にあたり
日本クロツラヘラサギネットワークの全会員、
ご協力をいただいているすべての皆様に
深く感謝をいたします。

【写真提供、編集協力】

Chang Perry

上村司 小手川清隆 高野茂樹
田代省二 花田正孝 松本芳文
宮崎八州雄 宮野啓子 山口廣
山城正邦 渡辺徹 他 (敬略)

Special Thanks to

Wang Jeng-Jyi (Mr.happy)

【編集】

日本クロツラヘラサギネットワーク事務局

日本クロツラヘラサギネットワーク

代表 / 高野茂樹

事務局 / 松本 悟

福岡市南区大橋 1-4-20-601

TEL 092-408-5214

E-mail : cocontei-matsu@nifty.com

《頒価 : 500 円》



このパンフレットは「公益財団法人再春館一本の木財団」の
助成によって制作されました。



守る、つなげる、共に生きる。

公益財団法人 再春館「一本の木」財団